



—チェルノブイリに思いをよせて—

# ポレーシェ

## BDFの勉強会を実施しました！

4月21日、河田・神野(美)・神谷・戸村・宮腰・小牧・原の7名で、滋賀県愛知郡愛荘町「愛知(えち)食油」の製油工場を訪問しました。

この工場は、小さな平屋建てですが、年季の入った立派な工場でした。当初、搾油工程とその後の不純物の処理作業だけの見学をお願いしていたのですが、製油工場内を見学した私達の、熱意ある質問せめに応えて、焙煎の工程も付け加えてくださいました。



お陰で、収穫後のナタネが製品(ナタネ油)になるまでの全工程を、見学させてもらうことができました。愛知食油の工場では、ほとんどの作業を西堀さん一人で切り回していて、【焙煎⇒搾油⇒水洗い⇒分離⇒濾過⇒精油】の工程が、シンプルで分かりやすくなっていて、「ナタネ油がどのような工程を経て作られ、私たちの手元に届くのか」が、とても良く分かりました。

しかも、現在、「国産のナタネだけにこだわり、ナタネ油を製造している」ところは少なくなり、貴重な製造作業だとのことでした。そして、ウクライナでの搾油の実態に合わせて、具体的にイメージすることもできました。

愛知食油の見学後、「あいとうエコプラザ・菜の花館」も見学し、それぞれの搾油機械の違いも比較できました。原さんが、埼玉県熊谷市の米沢製油で見た製油方法も含め、とても収穫の多い勉強会だったと思います。(美)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10  
チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇  
郵便振替：00880-7-108610  
TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)  
ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

# 総会 & チェルノブイリ救済デー開催のお知らせ

日時 6月14日(土)

午後1時30分～4時

場所 **ウィルあいち 視聴覚室**

名古屋市東区上野井1番地

TEL 052-962-251

- 地下鉄「市役所」駅 2番出口より  
東へ徒歩約10分
- 名鉄瀬戸線「東大手」駅 南へ徒歩約8分
- 基幹バス「市役所」下車 東へ徒歩約10分
- 市バス幹名駅1「市政資料館南」下車  
北へ徒歩約5分



## 第一部 2008年度総会

- 2007年度事業報告および決算報告
- 2008年度の事業計画および予算



## 第二部 超最新「ナロジチ苦闘物語」

BDF・BGの工事に着手するため5月にナロジチ入りした原さんに同行した宮腰さんの映像を上映します。

### <2008年度事業方針>

今年度も、経済成長が進み徐々に医療環境が整ってきた「基幹病院」への支援から、汚染地でありかつ貧困が深刻な「ナロジチ地区」への支援強化へと事業内容をシフトしていきます。

これは、自立を促すための支援であり、ウクライナにおけるエネルギー革命のパイオニアを目指すものです。

## バイオエネルギーセンター 建物の改修と装置の設置工事に行ってきます！ (原 富男)

ウクライナからの連絡によれば、バイオガス (BG) とバイオディーゼル燃料 (BDF) 製造装置の設置申請の内、BDF について許可の見通しがつき、設置に伴う建物の改修工事に取り掛かることができることになりました。この連絡を受けて私と宮越さんが5月18日から訪ウし工事に参加することになりました。

今回の工事は、通称「バイオエネルギーセンター」と呼ぶ、BDF と BG の製造装置を設置する建物の改修・装置設置工事です。工事は、現在物置として使っている建物の中をまず掃除し、床をコンクリート打ちし、BDF 製造装置の部屋・薬品部屋・搾油部屋・自家発電機スペースなど、用途に応じて仕切り壁を作ります。また、各装置に水を供給するため、今まで使われていなかった井戸を修理し、給水パイプを建物の中まで敷設することになります。電気も、自家発電用発電機 (BDF で発電することができる) を設置を計画していますが、故障時を想定し、外部電源を引かなければなりません。そのため、配線も2系統を切り替えて使えるようにします。

短期間の中で、工事すべてを二人でやることはできませんので、コンクリート工事・壁工事・水道工事・電気工事などの会社と役割分担しながら、私達は彼らへの指示 (&実労働) をすることになります。今回は、大事な場面では竹内さんに通訳をお願いし、宮腰さんも (ビデオ撮影をしながら) 工事参加と日常通訳をしてくれることになり、大変心強く思います。

待ちに待ったバイオエネルギーセンターの工事を始められることを、嬉しく思います。気を引き締めて工事に着手します。それでは行ってきます！



## スタッフ情報

いよいよ出発まで、あと1ヶ月を切りました！ 12名の参加申込がありました。行程表を眺めて、あれやこれやとシミュレーションをしながら、「手配忘れが無いかな？」と毎晩思い悩んでおります。でも、「行くとしたら、絶対楽しまなきゃ！」(飛行機の旅も、乗り継ぎ国ヘルシンキの世界遺産も！)そして、帰国後には新鮮な眼で観た感想を誌上で、ご紹介したいと思っております。

放射能汚染の元凶「チェルノブイリ原発4号炉」や、廃墟の街「プリピャチ市」は、静かに生命力を取り戻す大地の「菜の花」に、大きな期待を寄せているようです。私たちはナロジチに滞在し、その美しく奇跡的な瞬間を見届けに行くのです。

シトール農業生態学大学では、昨年収穫したバイオマスや土の残留放射能を測定し、解析をしました。その研究は、今年度も継続されています。



滞在中には「ナロジチの住民報告会 (仮称)」を企画して、彼らの研究成果を報告していただきましょう。プロジェクトを行う5年間にどんな研究成果が得られるのでしょうか。楽しみです。

「大地が若い研究者の手で蘇える！」…素晴らしいことです。およそ20年間眠っていた「死に絶えた土地」が、近い将来、新しい息吹となり、移住した人々の手に再び帰ることを願って…。

(美)

## 「駐ウクライナ日本国大使から

### ウクライナ国への書簡」

—現在、私たちがウクライナで直面している問題に対して、日本大使館からもサポートいただいています。日本国大使の二通の書簡の抜粋をご紹介します—（原文はウクライナ語）

＜2008年4月16日付

#### ウクライナ大統領宛書簡より抜粋＞

『ヴィクトル・ユシェンコ閣下 あなたに対する深い尊敬の念を新たにするとともに、人道支援の分野の発展のため直接のサポートをいただいていることに感謝申し上げます。

この度、日本の非政府団体「チェルノブイリ救援・中部」（名古屋市）のイニシアティブについてお知らせする機会をいただくことを光栄に思います。昨年、当団体は、「ナロジチ地区復興ナタネプロジェクト」を実施し始めました。プロジェクトの目的は、汚染地域に住むことを余儀なくされている地区住民の社会・経済的生活水準を向上させ、チェルノブイリ原発事故の影響を受けた土地の生態学的安全性を取り戻すことです。（中略）このプロジェクトのため用いられる装置は、在ウクライナ日本大使館の推薦によってボランティア貯金の寄附金から提供された資金で購入されたものであり、商業上の目的で用いられることはありません。このようなプロジェクトの導入は、何よりも、放射能の農産物栽培に与える影響の研究に寄与し、また汚染地域の効果的な利用にも役立ちます。ウクライナ内閣付属人道支援問題委員会では、このことをご理解いただけなかったらしく、同委員会宛の陳情が何度も行われたのですが、残念なことに現在に至るまで、日本側から提供された資金と装置が人道支援と認められていません。この問題が肯定的な解決を得るべくお力添えをいただけますよう、お願い申し上げます。』

#### ＜2008年4月2日付 人道支援問題委員会宛書簡より抜粋＞

『内閣付属人道支援問題委員会議長（ウクライナ国副首相） I.V.ヴァスユヌィク殿

（前略）この度折り入ってお願い申し上げたいのは、2008年3月6日付の、200万円の人道支援金に関する貴委員会の決定、及び2008年3月20日付の、総額9,347,500円の貨物に関する決定を再検討していただきたいという件についてです。（中略）日本側はバイオディーゼル燃料生産のための装置を送ることにしました。それを設置するためには、建屋ばかりでなく、水道の敷設等の作業が必要です。そのために用意されたのが、今回人道支援とは認められなかった200万円なのです。（中略）日本国政府は、チェルノブイリの悲劇の影響の克服を目的とするプロジェクトに大きな関心を持っており、本プロジェクトの重要性に कांगがみ、申請に対し肯定的な決定を下されますようお願いいたします。』

### ナロジチ・ホットライン

これまで、日本からナロジチへの通信は困難でしたが、今回訪ウ中の宮腰さんの力で、開通しました!! パソコンのメール、パソコンを通しての電話連絡も可能になり、現地レポートが飛躍的に便利に、かつ迅速になりました。



\*08.05.25 本日、配電会社勤務の運転手さんの車で、スタルシャルノの我らの「菜の花とライ麦畑」に行ってきました。菜の花の開花時期は終わりに近づき、さやがではじめています。菜の花、ライ麦とも生育は順調です。ドイツの畑も見ましたが、生育状態は悪いです。

\*08.05.27 本日、ナロジチの宿舎からメールができるようになりました。理屈は分からないのですが、宮腰さんが頑張ったので、開通を祝って本日は米を炊き、みそ汁を作り、その上、これでもか…と、ふりかけも付けちゃうことに2人で決定しました。ああ、めでたい!



＜前列右から2人目が馬淵大使、左端が原さん＞

## 菜の花サミットに参加しました (小牧 崇)

5月17～18日、全国各地で「菜の花プロジェクト」に取り組む人々が一堂に会すサミットが、信州・大町で開催された。18日朝7時、関さんを中心とした「伊那谷菜の花楽舎」の面々と、伊那を立て大町に向かう。主催者側の予想を越す500名が集まり、会場は人で溢れていた。

心惹かれる分科会が数多くあったが、私たちはBDFをテーマとする第3分科会に参加したが、北

は北海道から南は鹿児島まで、16の道府県から30名以上。NPOのメンバーが多いものの、市や県の職員・生協やトラック協会職員・大学・研究機関の職員・教員・レストラン経営者など、参加者もバラエティに富んでいる。この分科会は、滋賀県でBDFも扱うガソリンスタンドを経営する「油藤商事(4代前の藤八さんが始めた油商売に由来するので[あぶらとう]と読む)」青山さんの、パワーポイントを駆使したレポートを軸に進んだ。ゴミリサイクルから始まる彼の報告は、とても魅力的だったが、ここでは後半議論となった「BDFの問題点とその対策」について紹介する。

◎**水との親和性**…軽油にはないがBDFにはある。そのため、燃料タンク内の水分と混合し、ジェル化してフィルターの目詰まりの原因となる。…フィルター交換をこまめに。

◎**酸化が進みやすい**…「酸化安定剤」の添加が望ましい。(3ヶ月は持つ)

◎**氷点下3度前後から固化がはじまる**(これは軽油も同様)…寒冷地大町では「流動点降下剤」を添加している。

◎**「軽油とBDFはウスキーと日本酒の違い」**…いったん開封すると長持ちしない日本酒と同様で、BDFは品質管理に気配りが必要だ。そこで使い方は、「毎日使う・使い切る」ことが大切。

これからスタートするナロジチでのBDF生産を想定して、用途を考えると、発端は3年前ナロジチ地区ボロトヌィツァ村の農場を訪れた際耳にした「燃料を買う資金がないので、農業機械を動かせない…」という嘆きではあるが、通年使用の難しい農業機械よりも、とりあえず「通園通学バスとか発電機の燃料」として使うのが良いのではないかと思った。

休憩時間に、長年反原発運動に関わり、現在「東海村菜の花エコプラン」を推進している方から声をかけられ、エール交換。会終了後には、「原発の職員です」という方から、「ナロジチ・菜の花プロジェクト」について熱心な質問を受け、チラシを手渡した。

閉会の挨拶で、「菜の花プロジェクトネットワーク」代表の藤井絢子さんは、住民が議論を積み重ねるなかで、(原発でもなく化石燃料でもない)バイオマスによる地域自立をめざす「ドイツ・ユーンデ村の取り組み」を紹介し、エネルギーの「地産地消」を訴えた。全国各地で地域に腰を据え運動を進めてきた人々の話は、とても示唆的だ。二日間じっくり聞いてみたかった。次回の開催地は愛知県田原市とのこと。是非参加したいと思っている。

終了後、陽もまだ高いので、今回のサミット事務局を担当した大町の市民グループ「NPO 地域づくり工房(ホームページあり)」が元スキー場を開墾した菜の花畑を見学。緩斜面に広がる菜の花畑には、蜜を求めて蜂が盛んに行き交っている。手前の里山はちょうど新緑。その向こうには、雪をまだたっぷりと乗せた、「北アルプス連峰」が連なる、見事な風景が広がっていた。

このグループは、収穫した菜種を搾油・濾過した「菜種オイル」(我が家では大評判)の製造・廃食用油を使ったBDF生産、ミニ水力発電などに取り組んでいて、随時見学会を受け入れている。新緑の5月、お奨めです。



# ナロジチ再生・菜の花プロジェクト報告会

チェルノブイリ原発事故からちょうど22年目の4月26日、報告会を開催しました。開催場所の「あいち NPO 交流プラザ」は、5月より「ウィルあいち」に移転することになっており、長年お世話になったこの建物を使わせていただくのは、これが最後となりました。

を開催しました。



まず、映画上映からスタート。昨年9月に訪問したときに撮られた映像が主で、被曝防護服に身を包んだスタッフが菜の花畑に入り、放射能を測定している姿などの映像もありました。

菜の花プロジェクトを2年前から撮り続けている宮腰さんが映し出すナロジチの風景は、プロジェクトが進むにつれ、住人が、町が、どのように変わっていくのかを楽しみにさせ

てくれるものでした。

プロジェクトのキーパーソンである原さんの報告は、いよいよ始まるバイオディーゼル燃料とバイオガスの製造の具体的な説明でした。3年前の秋、原さんと小牧さんがナロジチを訪問したときの住人の話からヒントを得たこのプロジェクト、日本とは全く事情が異なる国での設置工事は、「待ってました」とばかりの難問続き。自称「お気楽男」の原さんも青ざめるほど。そんな苦労話を交えての説明でした。まだまだ艱難辛苦…ing だけど、苦労話を笑い飛ばすであろう、次の報告会がとても楽しみです。



河田さんの報告は、本邦初公開の土壌浄化分析結果。1年目の栽培結果から得た貴重なデータを基に、今後の栽培方法を模索していく、という頭脳大作戦です。

「菜の花プロジェクト」を始めてからは、医療支援が主だったときとは異なる顔ぶれが、報告会などに足を運んでくださるようになりました。「緊急支援から復興支援へ」と変化をしている表れでしょうか。今後、支援者の皆様にさらに関心を寄せていただくための努力を続けていきます。

(市原)

## 私たちの愛するヴァロージャさんへ

ウクライナから、また訃報が届きました。なんとジトーミル消防局長のボロディーミル・ゲルゴフスキーさんです。

まだ40代半ばでありながら、消防士たちを指揮する現役の局長として活躍中でした。彼は、いつもギターと楽しい歌声で、私たちの疲れや緊張をほぐしてくれました。また、ナロジチで働く若い消防士たちや、事故処理作業者の「チェルノブイリの消防士基金」のために心を砕いておられました。それなのに思いがけない訃報に、私たちは言葉を失いました。若い消防士たちの早すぎる死が多く、また今度、彼のいなくなってしまうことは残念でたまりません。彼にはジトーミルの風になって、ナロジチの再生プロジェクトを見守っていただき、私たちは懸命に努力を続けることを誓いたいと思います。

(5.24 戸村)



2年目に入った「ナロジチ再生菜の花プロジェクト」は、いよいよバイオエネルギー生産体勢に入る。3月末に名古屋港から送り出したバイオディーゼル製造装置は、すでにウクライナのオデッサ港に到着、政府の許可を得てナロジチに搬入する準備に入っている。しかし、ここにきてプロジェクトは大きな壁に突き当たっている。旧ソ連の官僚制による「許認可の壁」である。何をすすめるにも行政の認可が要る。当然時間がかかるが、めげずにプロジェクトの実現に努力したい。

2008年はプロジェクト全体の正念場でもある。皆様の応援をお願いしたい。

### ● 菜の花栽培の状況

昨年秋に播種した秋撒きナタネは今、花盛りを終えて種が付き始めている。昨年の春蒔きナタネと比べてどのような結果になるかは、今後分析で明らかになる。また、2年目の春撒きナタネは天候の影響で少し遅れ、5月9日に播種した。順調に生育中で、6月～7月には開花の予定である。ナタネは連作障害があり、同じ畑に毎年作付けはできないため、ナタネ栽培後はライ麦、その後は蕎麦などを植え、4年目に再びナタネ栽培になる。そのため、畑は合計12ha必要である。昨年の春撒きナタネの後に植えたライ麦も、順調に育っている。ナタネ以外の作物はバイオガスなどの原料に利用できる。このプロジェクトはバイオディーゼルとバイオガス製造を連結させ、資源と廃棄物を循環利用するのが最大のメリットで、このシステム自体が実験である。

### ● バイオディーゼル油製造装置を輸送

このプロジェクトの中核をなす菜種油からバイオディーゼル油(BDF)を作る装置は、約半年間国内外の装置を調べ、山形県のMSD社が開発した「BDK-200II」という装置に決定した。ドイツなどヨーロッパ製は規模が大きく、我々のニーズに合わず、ウクライナ製はまだ試験段階で、製品としての完成度が低い…、というのがその理由である。「BDK-200II」は、3.5時間で200㍏のBDFを生産できるので、一日2回運転すれば400㍏のBDFを生産でき、十分実用性もある。我々の試験畑で取れる菜種油では、2週間ほどで使い切ってしまうほどの生産能力

がある。従って、その後は農家との契約栽培などを考えなければならない。このBDF製造装置は、3月末に名古屋港からウクライナのオデッサ港に向けて輸出され、5月はじめにはオデッサに到着した。しかし、ナロジチに搬入出来るのは6月10日過ぎの予定である。遅れた理由は、ウクライナ政府の許認可制にある。

### ● 立ちふさがった規制の壁

これまでも、医薬品や医療器械などの救済物資は、ウクライナ政府内閣所属の「人道支援委問題委員会」の許可が必要であった。今回もそれに従う。ところが、BDF製造装置の支援には、この委員会から「待った」がかかった。20年近くの救済活動ではじめてのことである。理由は「バイオディーゼルなどは、利益を生む恐れがあるので、人道支援とは認められない」というのである。我々は、ナロジチでの土壌浄化と農業復興を目指して、このプロジェクトを始めた。当然BDFやバイオガスは現地の人々に還元することが前提である。現地との契約にもそのことは明記されている。しかし、人道支援問題委員会はこれを認めない、という。こうしたやり取りが1ヶ月も続き、日本政府（在ウクライナ日本大使館）の応援（p4参照）もあって、「これらの装置の所属を農業大学にし、実験用という名目でなら認可する」ということで決着した。最近になり、BDF装置の運転にも、また別の認可が要る事が分かった。こうした許認可が、今後山ほど待ち構えている。先が思いやられる。

それでも我々はあきらめない。（河田）

## \* 菜の花通信 \* (読者からナロジ千へ)

### 尊敬する クラフチェンコ様

ウクライナ人が、「チェルノブイリ救援・中部」の名の下で書いていることにびっくりされるでしょう。

私は日本語が専門であり、現在、東京外国語大学の博士後期課程に在籍しており、日本の広告文章を研究しております。

「チェルノブイリ救援・中部」の人達とは、昔々、第一回目のスタディーツアー（1996年）の時にキエフで知り合いました。私は当時、大学の一年生で日本語をやり出したばかりの者でしたが、教師の一人がよくご存じの竹内先生でした。東京での留学が始まってから、自分もチェルノブイリ救の会員になりましたが、その理由としては、大きく貢献したのが「菜の花プロジェクト」（⇒土壌浄化とバイオシステム復活・地元電力生産による生活水準の向上のために菜の花を栽培すること）の存在です。

実際のところ、ウクライナにとっては、輸出のためにバイオ燃料の植物を栽培することが戦略的に不利なのです。最近、世界中で石油が高くなり多くの国が積極的にバイオ燃料を使用しはじめています。ウクライナには、工業に十分な石油資源もガス資源もないため、数年後おかしい状況になりかねません——我々が栽培した菜の花の8～9割をドイツやオーストリアに輸出した上で、そこから我が植物で作られたバイオ燃料を輸入してしまう！

これは、この頃の世の中で、材料ではなく、商品を作る人のほうが最終的かつ最大な利益をもらうからなのです。



〈中央がイリーナさん〉

菜の花は、土壌から放射線を吸収し、食べ物の栽培を可能にする。バイオディーゼルやバイオガスプラントは、地元の低価格なエネルギーを作り出す。——これらは、あなたやあなたの子どもにとって、未永くチェルノブイリ悲惨の犠牲者であることをやめるチャンスであり、1986年以前にあなたがたが持っていたことをとり戻すチャンスでもあります。

尊敬の意を込めて 2006.04.12  
イリーナ・ペトリチェンコ

### ポレーシェ、ありがとうございました！

こんにちは、大阪府枚方市に住む豊高と申します。

3月31日発行の最新号、菜の花プロジェクトの進行をわくわくしながら読みました。（と言っても、難しいことは何かもう一つ分かっていないのですが。）4頁と5頁の菜の花通信のやり取りを読んで、「なるほど、何かを進めるといことは難しいことなのだなぁ」と思いました。そして、人の思いに対して「誠実で答える」ということと、でも、「何もかもできるわけではない」ということ、そんなことをしっかりと「相手に分かってもらうように説明する」ことの大切さを思いました。日本人なら、こんな提案は出さないのではないかと思ったりもしたのです。

菜の花については、たまたまうちの8歳の息子が今とても興味を持っているので、菜の花プロジェクトのことも話してやりました。息子とそんな話ができて、とても嬉しかったです。私が毎日書いているブログにも、救援中部のこと、菜の花プロジェクトのことを書きました。

<http://plaza.rakuten.co.jp/akkieandphoenix/diary/200804110001/>

## 駐日ウクライナ大使に会う

4月25日、「慈善団体代表者の会」に参加するため、東京・西麻布にあるウクライナ大使館に赴いた。ウクライナに送った BDF 関係の支援物資等が「人道支援物資と認められず、課税対象になりそうだ」という今回の事態に対し、駐日大使の善処を求める為だ。地図を見ながら六本木ヒルズ高層ビル群の横を抜け、高級住宅地にある大使館を探した。黄と青の国旗を目印に歩いたが、なかなか見つからない。住宅地の一画をぐるぐる回って、ようやく高い場所に掲げられ、街路樹に隠れた国旗を発見し、館内に入ることが出来た。

会は地階のホールで行われた。参加者は約 30 名。幡豆町からの参加が目立つ。大使館で落ち合ったイリーナ・ペトリチェンコさんの話では、大使は挨拶のみで退室される可能性が大ということであったが、幸い最後まで列席されパーティーの途中で直接お願いできた。

口火を切ったのは私だが、後は事情を良く理解しているイリーナさん（p8 も参照してください）がとうとうと訴えてくれ、依頼文書を提出することを条件に、ミコラ・クリニチ大使は善処を約束。一安心したのだった。（小牧 崇）

## チェルノブイリは歴史上の事実

連休明けの 8 日、椛山女学園高校 2 学年恒例の環境講演会に参加し、1 組 40 名を相手に午後の 2 時間チェルノブイリの話をした。「事故や原発について、ほとんど知りませんのでよろしく」と担任の先生から一言。あの事故は、彼女たちの生まれる 6 年前のことであり、当然だろう。

1 時間目は、持参した本とプリントを使って、「原爆から原発事故まで」概説したが、反応はいまいち……。2 時間目は、ナロジチで撮影した写真を中心に作成した、「スライド」と菜の花プロジェクトを紹介する、「テレビニュース」を使って展開。生徒の反応も良く映像の持つ迫力を実感した。（小牧 崇）

### \* 菜の花便り (その 7) \*

4月26日のチェルノブイリ原発事故 22 年周年を前に、12 日名古屋国際センター別棟ホールで「広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会」「チェルノブイリ子ども基金」「DAYS JAPAN サポーターズクラブ名古屋」の主催で救援コンサートが開かれました。直前までチケットの売れ行きが心配されたのですが、8 日ナターシャ・グジーが「徹子の部屋」に出演するやいなや、美しい歌声と彼女自身の美しさに魅了された視聴者でチケットは完売。300 人近くの方が会場を埋めてくださいました。期待に違わず、バンドウーラの響きと透明な歌声は、友人曰く、「心が洗われた」。事故さえ起きなければ日本に来ることもなく、日本語を話す必要もなかったのに、流暢な日本語で語る自らの被爆体験に、皆耳をそばだて、清らかな歌声に会場全体がウットリとしている様子が、一番後ろでスタッフとして見ていた私にも伝わってきました。また、広河さんの講演は、ホールに展示した事実を伝える写真とともに、今世界で、日本で、起こっていることをありのままに訴える力強いものでした。ナターシャが目当てで、広河さんの話は初めてだった方からも、「本物の静かなジャーナリストの話が聞けた」と好評でした。救援・中部は菜の花プロジェクトのパネル展示をし、ともすれば暗くなりがちな話題の中、黄色い菜の花は明るい未来への象徴となり、来場者にプロジェクトの意義をアピールすることができました。（榎本）

## 竹内さんのウクライナ便り

4月26日、チェルノブイリの日は、快晴で暑いぐらいの天候でしたが、その前後は例年より低めの気温が続き、雨も多かったので、カシタン(西洋トチノキ)やライラックの花は、いつもより長く咲き続けています。4月29日に予定されていた、ナロジチの我々の畑での春播きナタネの播種作業も、途中で雨が降り出したので延期になり、メーデーの連休の後、5月5日に行われました。しかし、昨年の春播きナタネの栽培区画に播かれた秋播きライ麦や、その隣の区画の秋播きナタネは順調に育っています。

4月11日には、ウクライナ日本センターで「チェルノブイリ復興と日本」というシンポジウムが開催され、日本も資金を提供している「国連開発プログラム」のチェルノブイリ復興開発プログラム担当者や、日本大使館の外部調査員の方の報告がありました。私にも、「救援・中部」のナタネプロジェクトについて報告するよう依頼がありました。このシンポジウムには、「チェルノブイリの人質たち」基金のドンチェヴァ氏や、ジトーミル農業・生態学大のディードゥフ助教授も来ており、プロジェクトの技術的な面については、ディードゥフ氏に補足してもらいました。会場には、プリピャチからの移住者団体「ゼムリャキ(同郷人)」の人たちも招待されて来ており、彼らからいくつも質問がありました。

5月初め、広島「ジュノーの会」が派遣した甲状腺検診団の通訳として、キエフ州の東のチェルニゴフ州の汚染地域に行った際にも、途中でナタネ畑が何ヶ所も見られ、これは昨年の同時期には見られなかった光景だと思えます。ジトーミル州内では、2002～03年のナタネ栽培面積が1,450haであったのに比べ、2008年中に収穫が予定されているナタネ畑の面積は34,000haとの新聞報道がありました。しかし、ウクライナ向けの改良種の開発や最新の栽培技術の導入が遅れていることもあり、同州でのナタネの平均的収穫高はEU諸国での2分の1にとどまっている由。



ナロジチ町では、地区行政庁の向かいの公園内で、4月26日を前にチェルノブイリの犠牲者を記念する礼拝堂が造られており、5月22日、日本国外務省の「草の根無償支援」プログラムによる同地区内の診療所への医療機器提供事業の「引渡し式」が行われるのに先立ち、馬淵日本大使ら大使館関係者もそこに案内されました。ちょうど正教の聖ニコライの日ということで、聖歌隊を伴うお勤めが行われているところでした。ナロジチに滞在中の、「救援・中部」の原さん、宮腰さんと一緒に私もそれに同行しました。しかし前日、礼拝堂建設に携った町内の業者から、「短い工期で急がされたばかりでなく、行政関係者の恣意で3度も設計を変更させられた」というグチを聞いていたこともあり、また、本来、チェルノブイリの日を控えてユシエンコ大統領の同地区訪問が予定されており、それにあわせて造られた礼拝堂だったのが、予定の数日前に訪問がキャンセルされたという話もあったので、それを初めて間近に見るのはいささか複雑な感慨を誘うものでした。木肌があらわでこぢんまりした、素朴な感じの作りでしたが、4月26日当日には、上記の団体「ゼムリャキ」の人たちが住むキエフ市東北の地区で、新しく建てられたチェルノブイリの記念碑の除幕式があり、私も誘われて行って来ました。こういうモニュメントや、式典というものの自体は、私は個人的には苦手なのですが、やり場のない思いを託すせめてものよすがとして、何らかの「形」を求める人々もちろん一方で存在し、その「形」にまた別の思惑を込めようとする人々もあるということなのでしょう。(5月23日)

NPO法人チェルノブイリ救援・中部 2007年度 収支報告書

(2007.04.01～2008.03.31)

収入の部		支出の部	
項 目	金額(円)	項 目	金額(円)
救援寄付金	5,811,348	<b>事業費</b>	7,535,640
個人(533件)	5,700,173	医療機関支援事業費	850,000
団体(3件)	111,175	医療機器提供事業	0
運営費関連寄付金	404,000	医薬品提供事業	850,000
個人(55件)	404,000	保健事業費	769,987
団体(0件)	0	粉ミルク提供事業	769,987
菜の花プロジェクト寄付金(305件)	13,407,235	被災者団体等支援事業	2,100,000
チャリティコンサート参加収入	200,000	評価事業	0
民間助成金	1,050,000	奨学金事業費	961,396
地方公共団体助成金	244,000	特別事業費	1,081,485
雑収入	88,950	派遣費	0
預金利息等	25,536	業務委託費	499,996
		駐在員費	299,951
		支援輸送費	0
		文通・クリスマスカード事業費	74,835
		通信誌発行	865,175
		国内監査費	0
		イベント参加費	32,815
		キャンペーン	0
		<b>管理費</b>	3,203,461
		給料	1,586,000
		印刷製本費	150,300
		旅費交通費	344,556
		会議費	13,000
		消耗品費	110,984
		通信費	230,223
		支払手数料	99,154
		諸謝金	31,000
		諸会費	33,000
		水道光熱費	22,304
		地代家賃	575,440
		租税公課	2,000
		雑費	5,500
<b>当期収入合計</b>	<b>21,231,069</b>	<b>当期支出合計</b>	<b>10,739,101</b>
		当期収支差額	10,491,968
<b>前期繰越収支差額</b>	<b>8,833,242</b>	<b>次期繰越収支差額</b>	<b>19,325,210</b>
<b>収入総額</b>	<b>30,064,311</b>	<b>支出総額</b>	<b>30,064,311</b>

上記期間の収支報告書を監査した結果、公正に処理されていることを証明します。

決算を終えて：

当期支出合計は1,074万円で、昨年度よりも見かけ上312万円減少しています。その理由は「新規特別事業」が昨年度の国際ボランティア貯金寄附金配分助成事業となり、2007年度から2008年度にまたぐ事業となったため、今期の実際の支出1,545万円を2007年度3月末の決算とせず、「貸借対照表」に未成事業として載せ、2008年度の収支報告書に載せることとしたためです。(神野)

## 事務局便り

春には嵐がつきものだ。前号のポレーシェで「はじめまして。・・・厳しい環境にいる人々への共感や想像力を大事にしていきたい・・・。」と会計に就任された方は、私達に厳しい環境を残し、就任してまもなく辞められ、啞然。しかし、「捨てる神あれば拾う神あり」。その「拾う神」は、名古屋 NGO センターの M さん。事務局職員候補を紹介してくださった。ありがとうございました。そして、登場したのが、山本梨恵さん。大学を卒業して2年目のやる気満々フレッシュレディ。大いに期待しています。皆さんヨロシク！

さて、薫風の五月。爽やかな便りをお届けできると思いきや、春の嵐未だ吹きやまず・・・。一難去って、また一難。菜の花プロジェクトは順風満帆とはいかないようだ。・・・が、タイムリーにもスタディツアー。現地の人々の理解を深めるチャンスだ。期待したい。 (山盛)

## 自己紹介

こんにちは。5月からチェルノブイリ救援・中部でお世話になっております山本梨恵です。事務所では、会計事務の担当をしています。昨年、大学を卒業したあと、9月から半年間、名古屋 NGO センター主催の『次世代の NGO を育てるコミュニティ・カレッジ (NGO スタッフになりたい人のためのコミュニティ・カレッジ 通称:Nたま)』に参加していました。半年間、インターンや数多くの講座・海外研修を通して多くのことを学びました。



学んできたことが役に立てば・・・と思います。会計の仕事をするのは初めてなので緊張しますが、少しずつ自分流のやり方を他のスタッフさんたちと一緒に研究し、見つけていけたらいいなと考えています。多くの方々からいただいた寄付金を、効率よく被災者のもとへ届けられるよう頑張ります。

## 編集後記

- ☆社会参加する若者。社会人としては未熟で、実力があるのに生かし方が分からない。それをうまく引き出すのが先輩の義務だ。2ヶ月余の今、実力を発揮しチームの一員に！こなす仕事量は、目を見張るものがある。周囲を見て、手伝う気配りも出てきた。嬉しい！ (美)
- ☆「サザンオールスターズ無期限活動休止」で40代は、さぞかし青春を振り返っていることだろう。林檎世代からメタボ世代へと変異してしまった、元新人類たち。かくいう私のことです。(佳)
- ☆ショックだった、ヴァロージャさんがいなくなるなんて。7年前、愛妻イーラさんとともに一緒に旅をした。その後消防局長に就任。若者だった彼はだんだんと貫禄がついて、頼もしかった。私の周りの先に逝った人と、私の中で会話する。(京)
- ☆原油の高騰が、諸物価の上昇をあおっている。世界中の企業や個人の収入が、根こそぎオイルメジャーに吸い取られていく。端を発したのは「9.11 テロ」、そして「サブプライムローン」。そろそろ、「お金のからくり」と「9.11の真実」を勉強しないと、丸裸にされますよ。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473